

---

# 怖い家

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怖い家

### 【Nコード】

N9842E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ベテラン営業上村莞爾は何の変わりもない家のチャイムを押したところの中から出て来たのは。日常を扱ったホラーです。実際にごく稀にこうした人間はいます。

## 第一章

怖い家

上村莞爾がこの地域の担当になったのは特に深い理由があったの  
ことではない。本当にたまたまであった。

「じゃあ頼むな」

「はい」

上司である課長に言われてすぐに答える。答える方も伝える方も  
本当に深いものはない。あくまで仕事のうえでのことだと割り切っ  
ていた。

「わかりました。それでは」

「あそこは別にヤクザ屋さんとかはいなかったな」

「そういう場所じゃないですしね」

上村は課長にこう答えた。

「普通の住宅街ですから」

「それも中流のな」

「ええ」

俗に格差社会だの中流崩壊だの言われているが実際は中流家庭が  
主流であり続けている。これは上村の考えだが間違っているとは思  
っていないかった。

「だから別におかしな訪問先もないしな。安心して頼むぞ」

「ええ、では」

「いや、本当はな」

課長はここで上村の顔を見て楽しそうに笑ってみせた。

「君にはもっと面白い場所に行ってもらいたいかなとも思っている  
んだ」

「面白い場所といえますと」

「あそこは坂道が多いとかそういうのじゃないからな。平坦でわか  
りやすい」

「もつと複雑な地形の場所ですか」

「君はそういふ場所が得意だろ」

「足腰にも方向にも自信がありますので」

「そつだよな」

課長は彼の言葉を聞いて頷く。彼の体力もそつした地図を覚える的確さも評価しているのだ。だからこそその言葉であつた。

「だからだよ。といつても」

「決まりましたか」

「結構あそこに彼、ここに彼つて決めていつて」

「そこが私だと」

「そついうことだよ。別に深い理由があつて決めたわけじゃないがな」

これについては課長も自分で言うのだった。

「まあとにかく頑張つてくれ」

「はい」

やはり深く話すことなく言葉を交えさせる。

「いつものようにセールス売り上げ記録更新を期待しているよ」

「任せて下さい」

最後は課長にとつても上村にとつてもいい感じのやり取りになつた。これに満足しつつセールスに入る。最初から彼は好調で業績を次々とあげていた。まずは課長の期待した通りであり上村自信にとつてもいい気持ちでできている仕事であつた。

この住宅地は一軒家が立ち並ぶ簡素な場所だつた。昼には主婦や老人がいて夕方近くには下校の子供達を見る。犬や猫もいてのどかな場所だ。喫茶店もあり上村にとっては実に気持ちよく仕事ができる場所だつた。彼はこの日も順調に仕事を進め満足した顔で住宅地の中の公園で休憩していた。

ベンチに座りそこで缶コーヒーを飲んでいる。メタボリックに注意しているのかそのコーヒーは糖分が入っていない完全なブラックだつた。それを飲んでまずは一息だつた。

「さて」

一杯飲み干してから満足した顔で言う。

「もう一仕事つてところだな」

すぐに店を出て仕事を再開した。まず入ったのはごく普通の家だった。次も同じだった。最初の家は成功しなかったが次の家では成功した。これに気をよくして次の家に入った。ところがであった。

その家は異様な家だった。外観はそうではなかった。普通にチャイムを鳴らした後でイヤホンに出て来た声に応える。まずこの声自体がおかしかった。

「何だ？」

「んっ!？」

いきなり何だと言われて内心顔を顰めさせた。

（何だ、か。これはまた） 8

だがすぐに気を取り直した。こうした客も今までいないわけではなかったからだ。だからこう言われてもすぐに気を取り直すことができたのだった。

（まあいい）

内心こう言つて己を落ち着かせた。

（多少乱暴でもお客さんだ）

己の中で言葉を続けていく。

（それに）

ここであらためて家を見る。二階建てで白い壁にオレンジ色の傾斜の強い屋根を持っている。窓は大きく縁が黒い。綺麗な家であると言えた。

「いい家だな」

家を見て気を完全に落ち着かせるのだった。彼は家やアパートが好きだ。そうしたものを見ているだけで落ち着くところもあった。

これは幼い頃からであった。

「さて、じゃあ」

「おい」

だがここで。またイヤホンから声がしてきた。

「誰だ御前」

「私ですか」

「そうだ、御前だよ」

初対面の相手に随分ときつい物言いであった。

「御前、何だ？」

「私ですか。私は」

「早く言え」

上村が言うよりも先に言ってきた。完全に命令口調である。

「誰なんだ御前は」

「大和商事の上村です」

彼は内心引くものがあったがそれでもビジネスに徹して対応をした。この辺りは流石はベテランのやり手営業担当であると言えた。

## 第二章

「今回はですね」

「話があるのか」

「はい」

今度の問いには素直に答えてみせる。

「その通りです。実はですね」

「聞いてやる」

ここで向こうからこの言葉が出て来た。

「御前の話聞いてやる。来い」

「来いと言いますと」

「だから話を聞いてやると言っているんだ」

また言ってきた。今気付いたが初老らしき男の声だった。低く割れた感じのあまりいい意味ではなく実に耳に残る声であった。

「御前の話。だから玄関の中まで来い」

「宜しいですね」

「俺がいいって言ってるんだよ」

またしても随分とぞんざいな物言いが返って来た。

「この俺がな。だから入れ」

「わかりました。それでは」

「ただしだ」

だがここで声はまた偉そうに言ってきたのだった。

「下らん話はするな」

「それは勿論」

自分の話術には自信がある。だから彼はすぐに答えることができた。

「ではお話を」

「聞いてやるって言ってるだろ。だから入れ」

「はい、それでは」

こうして彼は玄関の扉を開けて緑の庭を左右に分けている白い道を歩いて家の扉まで来た。扉はダークブラウンで木製だった。この扉もまた実に荘重でいいものであった。

その荘重な扉を開けて中に入ると。そこにあったのは異様だった。  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「来たな」

異様な男だった。頭は禿げ上がり髪の毛はまばらだ。目は吊り上がり黒い目が不自然なまでに小さい。白いシャツに腹巻を巻き白ブリーフに黒いソックスといった格好だ。色は不気味に黒くそれだけで病気を思わせるものがあつた。人相も口が裂け不気味なものである。

「御前だな」

「はい、私です」

上村はとりあえずは普通に應對していた。ここでもビジネスマンに徹していた。

「この度はですね」

「御前が今度の敵か」

男は蟹股のまま彼に言ってきた。彼を睨んだままで。

「また俺を倒しに来たのだな」

「倒す？」

上村は彼が何を言っているのか一瞬わかりかねた。

「あの、何が」

「誤魔化すな」

睨みながらまた言ってきたのだった。

「俺の目は誤魔化されんぞ」

「目がといていまして」

「嘘をつけ！」

いきなり怒鳴ってきた。

「俺にはわかる。御前は敵だ、あの組織の刺客だ」

「組織!？」

またしても彼にはわからない言葉だった。

「あの、組織といえますと」

「御前はあの影の組織の幹部だな」

「一介の平社員ですが」

一応は次期課長候補とまで言われている。ゆくゆくは営業部長にも、とまで噂されている。しかしであった。自分の会社が影の組織だとは夢にも思っていない。

「誰でも最初はそう言う」

男は彼の話聞いてはいなかった。勝手に自分の言葉を出すだけだった。

### 第三章

「嘔吐きは嘔吐きのままだ。だが俺は違う」

「はあ」

「組織の刺客は抹殺する！」

またしてもわからない言葉だった。

「この俺が！許さんぞ！」

そう言つと彼は。何とすぐ側にあつた花瓶をつかんで投げてきたのであつた。

「死ね！神の前でな！」

「神！？」

「だから言っているだろう！俺の目は誤魔化すことはできん！」

「う、うわっ！」

飛んで来た花瓶を何とか避ける。花瓶は扉に当たつて粉々に割れてしまった。割れた花瓶から水と花が飛び散る。それは上村にもかつた。

「よけたか。それこそが組織の刺客の証拠だ」

男は何とか危機を避けた上村を見据えながらまた言つてきた。

「俺の目は確かだ。今度こそ貴様を殺す」

「殺すつて……」

「俺のこの手には黒い破邪の鎚がある」

今度はまたすぐ側にあつたゴルフクラブを掴んできたのだった。

それを両手に持つて振り回してきた。

「死ね！地獄に落ちろ！」

「なっ、何なんだ一体！」

流石にもう仕事にはならなかつた。振り回すクラブを必死に避けつつ扉を開けて家を出るのだった。

「だ、誰か！」

家を出ながら助けを呼ぶ。

「誰かいませんか！人殺しです！」

「黙れ！人殺しは御前だ！」

しかし男は相変わらずだった。何とブリーフとソックスのまま家から出て来て上村を追いかけて来る。そのうえでクラブを振り回し続けている。

「組織の刺客め！俺には神のお告げがある！」

「神！？」

「そつだ！白き偉大な破邪の神だ！」

よくわからないことを喚きながら迫って来る。

「俺にはその神がおられる！逃げられんぞ！」

「逃げるも逃げられないも」

後ろからとんでもない速さで追いかけてくる男から何とか逃れている。もう玄関を出てそこから道路に出る。しかしまだ男はクラブを持って追いかけて来ている。

「何なんだ一体」

「死ね、悪魔！」

今度の言葉はこれだった。

「悪魔は神によって滅ぼされる！覚悟しろ！」

「だ、誰か！」

上村は何とか逃げながら助けを呼びだした。

「何とかして下さい！狂人です！」

「誰が狂人だ！俺は本気だ！」

しかし相手は己を疑うことは微塵もない。やはり何処までもおかしかった。

「俺を疑うのは悪魔の証拠！悪魔よ、滅べ！」

「うわあああああーーーーーっ！」

クラブが背中に入たれ倒れる。だがそこでやっと通報されたか駆け付けて来た警官達が男を捕らえる。それで何とか助かった上村だった。

この事件の後で色々なことがわかった。何とか軽傷で済んだ上村

は傷が癒えて出社できるようになってから事件の顛末をあらためて課長に話す。それを聞いた課長はまずはこう言ってきた。

「まずは君の命が助かって何よりだ」

「はい」

「よかったよ。聞けば下手をすれば死んでいた」

「殺されるかと思いました」

上村は深刻な顔で課長に答えた。

「少なくとも相手は完全に私を殺すつもりでした」

「悪魔としてか」

「何かそんなことを言っていました」

このこともまた認めるのだった。

「神がどうか悪魔がどうか」

「らしいな。わしも話は警察の方から少し聞いた」

「そうでしたか」

「あの男はな」

「ええ」

話が上村を襲ったその男に関するものに移った。

「元々かなりおかしかったらしい」

「おかしかったのですか」

「近所でも有名な変わり者だったらしい」

まずはこう言われた。

「それもかなりな」

「かなりですか」

「そう、簡単に言うのだ」

「狂人だったと」

「そう言ってもいいな。何か少しでも気に入らないことがあると発作的に暴れ」

こうした人間は実際に存在している。

「しかも通常的に嘘をつき窃盗や暴行の常習者だったらしい」

「随分と危険な男だったんですね」

「何でも幼い頃両親から酷い虐待を受けていたらしい」

「虐待をですか」

「それでそうならしい」

男がそうになった理由についても述べられる。何事もまず原因や理由がある。今回もまたそれは同じであった。そういうことであった。「それでだ。職も長続きせず事故で死んだ両親の保険金や生活保護で生きていたそうだ」

「そうだったのですか」

「家で一人暮らしだったらしい」

課長はこのことも聞いていたのだった。

「それで一人で暮らしていてさらに生活も人格もおかしくなっている」

「そういえばですね、課長」

ここで上村はあることに気付いた。

「どうした？」

「あの男何かやっていたようですが」

彼が言うのはこのことだった。

「何か？」

「はい、具体的に言つと薬です」

怪訝な顔で課長に述べるのだった。

「あの男、薬もやっていたんじゃないかと思うのですが」

「ああ、それか」

課長はそれを聞いても驚かなかった。むしろごく当然といった様子で聞いていた。

「実はその通りなんだよ」

「そうですか。やっぱり」

「そう思ったのも当然だな、聞くところによるとな」

「ええ」

「やばい筋から薬を手に入れてやっていたそうだ。覚醒剤だ」

「やっぱりそれですか」

上村もまた話を聞いても全然驚かなかった。これは実経験ではつきりとわかっていることだったからだ。やはりそうかと思うだけであつた。

「そう、それで余計におかしかったらしい。近所の人達もそれなりに付き合わなくなつたらしいな」

「そうでしたか、やっぱり」

「君がそこに入ったのはな。運が悪かつた」

「運、ですか」

「わしも済まないことをしたと思っている」

課長は今度は謝罪の言葉を述べてきた。

「そんなおかしな人間がいると聞いていたら注意しておくべきだつた」

「いえ、それはいいです」

だが上村は課長のその謝罪はいいとして受けないのだった。

## 第四章

「いいのか」

「はい、仕方ありません」

こう言うのだった。

「何時でも何処でもおかしな人間はいるものです」

「何時でも何処でもか」

「課長も会われたことがありますね」

「おかしな人間にか」

「はい。それはどうですか」

「そうだな。それはな」

課長は上村からその言葉を聞いてまずは自分の思い当たるふしを  
探った。するとすぐに自分の過去でその思い当たるふしが見つっ  
たのだった。

「営業で回っていたらやはりな。おかしな人間もいた」

「そういうことです。結局私も同じです」

「同じなのか」

「確かに運が悪かったです」

自分でもそれは認めた。

「ですが有り得ることと言えば有り得ます」

「そうなるか」

「はい、それにですね」

「それに？」

「運が悪かったです。運がよかったということも言えます」

「言葉が矛盾しているな」

今の上村の言葉に突っ込みを入れてきた。

「運が悪くていいとは。互いに矛盾しているな」

「まあそれはそうですが」

「だが。そうだな」

しかしそのうえで上村の言葉を認めるのだった。

「殺されても不思議でないところを助かったのだからな」

「はい、そうなります」

上村も課長に対して頷いてみせた。

「結局のところは」

「そうだな。それにしても」

課長はさらに言ってきた。

「本当に訳のわからない人間はいる」

「最初から異様なものを感じてはいましたが」

「そうか。異様だったか」

「言葉遣いも妙でしたし」

このことも課長に対して話すのだった。

「それに関しましてはかなり」

「かなりか。見たところは普通に平和な街なのだがな」

「確かに平和は平和です」

「またしてもそれは認める言葉だった。だが全面的に認めるところではないのが今の二人のやり取りだった。ここでもそれは同じであった。」

「ですがその平和な街の中にも」

「おかしな人間はいるか」

「怖い家もまた」

「こつも言うのだった。」

「あります。実際に」

「少し見ただけではわからないか」

「残念なことに」

言葉と共に首を横に振ってみせる。

「そうなります」

「そうだな。本当に何時何処に何がいるかわからない」

「それが世の中です」

「全くだ。そしてその中には」

課長はあらためて言う。仕草が自然と上村と同じものになっていた。

「怖い家もあるしとんでもない人間もいるな」

「全くです」

この言葉が終わりとなった。課長も上村もこの事件の後も営業の仕事が続けた。これ以降はここまでおかしな事件には遭わなかった。しかしこのことはずっと忘れられなかったのだった。家の扉を開ける度に微かに思い出す程だった。

怖い家 完

2008・6・23

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9842e/>

---

怖い家

2010年10月8日15時36分発行